

◆ 今週のコメント

- ・ 水痘の定点当たり報告数は、2.27(93例)で、6週連続で増加しています。年齢階級別では、1歳が29.0%(27例)と最も多く、次いで2歳(16.1%, 15例)、3歳(12.9%, 12例)の順で、4歳以下で80.6%(75例)を占めています。
- ・ 流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、1.15(47例)で、先週に比べやや減少していますが、依然として過去5年平均値を上回る状態が続いています。年齢階級別では、5歳が21.3%(10例)と最も多く、次いで4歳が14.9%(7例)となっています。
- ・ A型肝炎について、本市での今週の報告はありませんが、全国では、第10週～第20週までの累積報告数が190例(平成21年は年間で115例)となっており、国立感染症研究所感染症情報センターから、再度、注意喚起情報が出されています。
京都市衛生環境研究所では、感染源の共通性を見出すため、ウイルス株の解析を行っていますので、医療機関におかれましては、届出の際に、糞便検体の提供をお願い致します。

◆ 今週のトピックス: <手足口病>

手足口病の定点当たり報告数は、2.80(115例)で、本年度で最も多くなっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- ・ 五類: アメーバ赤痢 2例(腸管アメーバ症 1例, 腸管外アメーバ症 1例)【1月以降の累積報告数 8例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	0.04	3
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	7.29	299
	② 手足口病	2.80	115
	③ 水痘	2.27	93
	④ 流行性耳下腺炎	1.15	47
	⑤ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.83	34
眼科	流行性角結膜炎	0.50	5

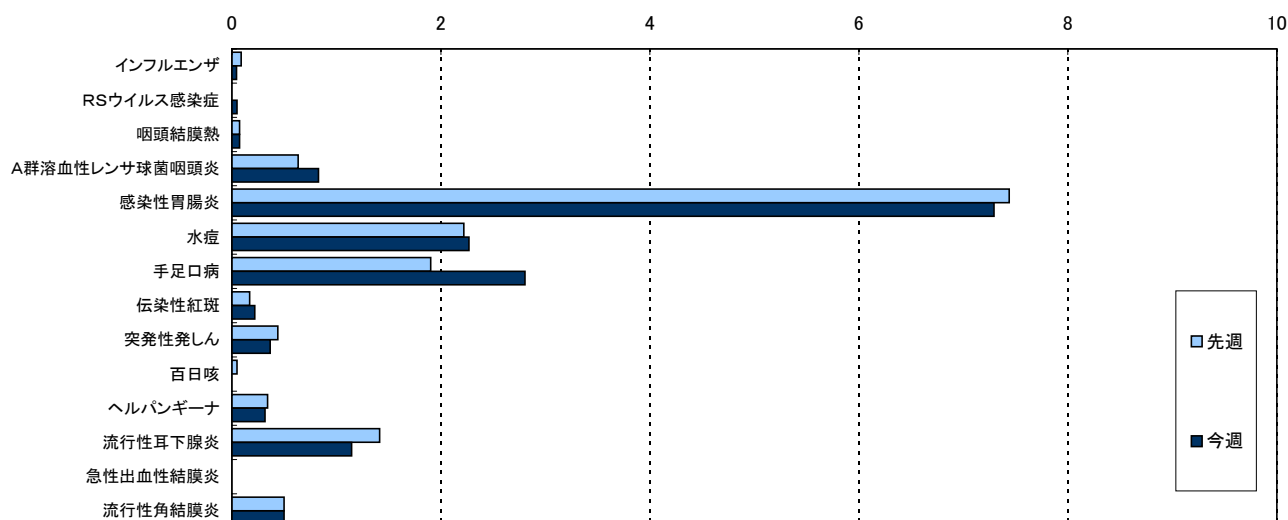
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <手足口病>

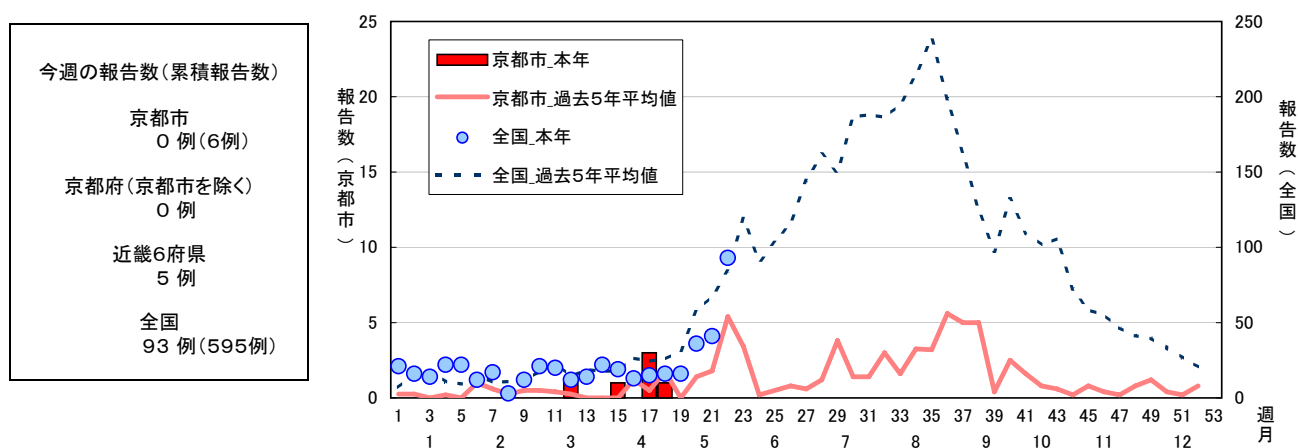
(注) 京都市のデータは、平成22年6月10日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第22週)と先週(第21週)の定点当たり報告数の比較



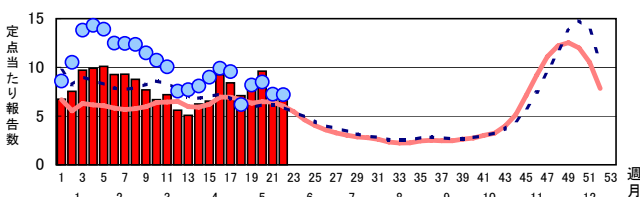
2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移



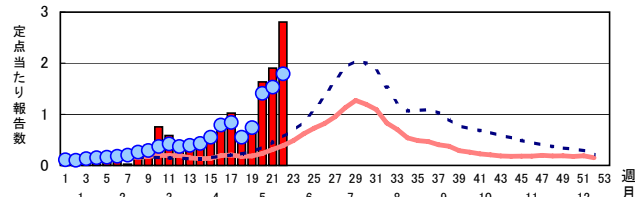
3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

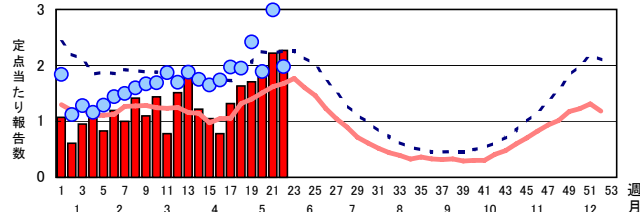
1 感染性胃腸炎



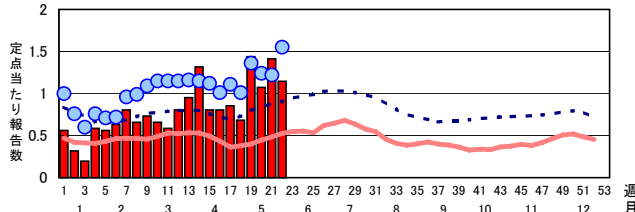
2 手足口病



3 水痘

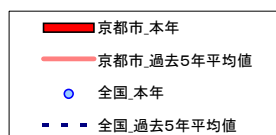
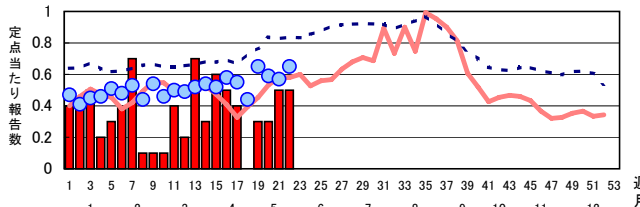


4 流行性耳下腺炎



<眼科定点>

流行性角結膜炎



第22週(5月31日～6月6日)トピックス:＜手足口病＞

手足口病の定点当たり報告数は、2.80(115例)で、本年で最も多くなっています。

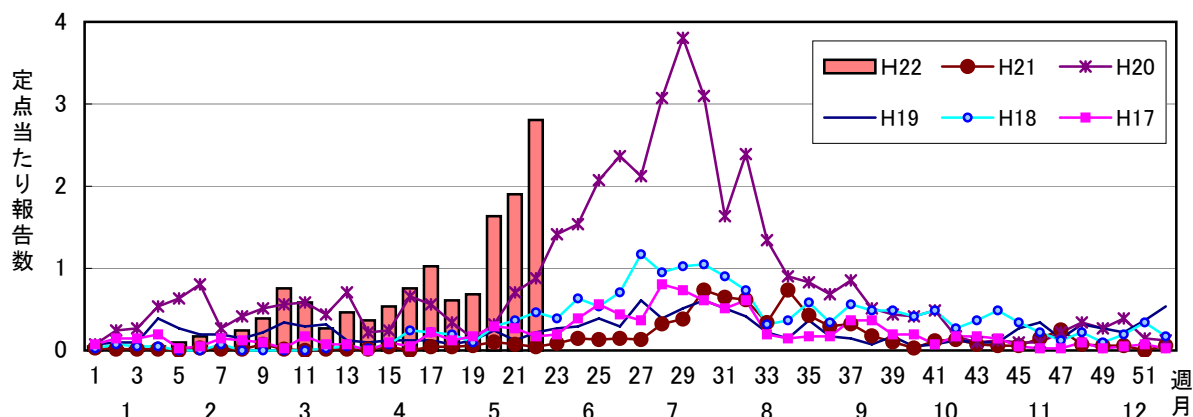
本年は、早い時期から患者数の増加が始まり、報告数が多かった平成20年と比べても、より高い値で推移しています。夏季に向け、更に増加することが予想されますので、注意が必要です。

年齢階級別割合をみると、1歳が27.8%(32例)、2歳が25.2%(29例)となっており、1歳～2歳で53.0%を占めています。

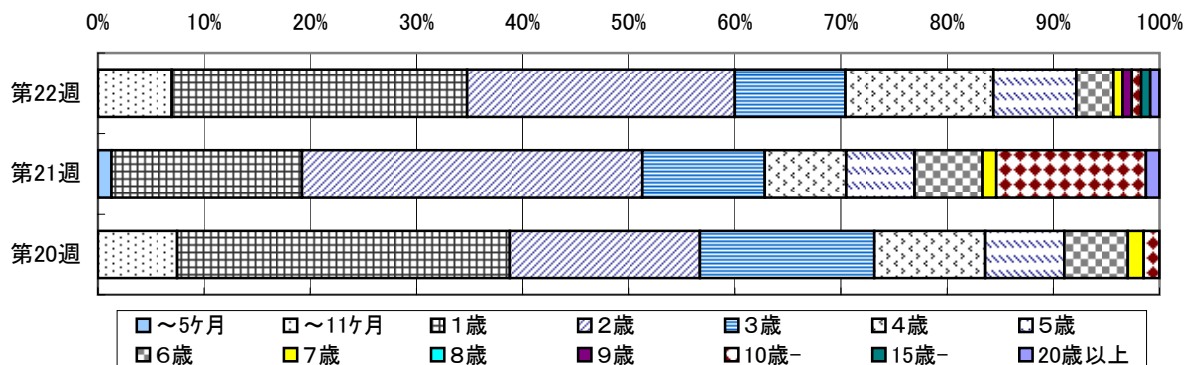
行政区別にみると、東山区、伏見区を除く9行政区で先週に比べ増加しており、特に南区で報告数が多くなっています。

原因ウイルスのうち、エンテロウイルス71型(EV71)は、中枢神経合併症の発生率が他のウイルスに比べて高いと言われています。全国では、本年、手足口病の患者の方から分離されるウイルスの約70%をEV71が占めています。京都市においても、既に2例(第3週、第8週)が分離されています。今後の動向に御注意ください。

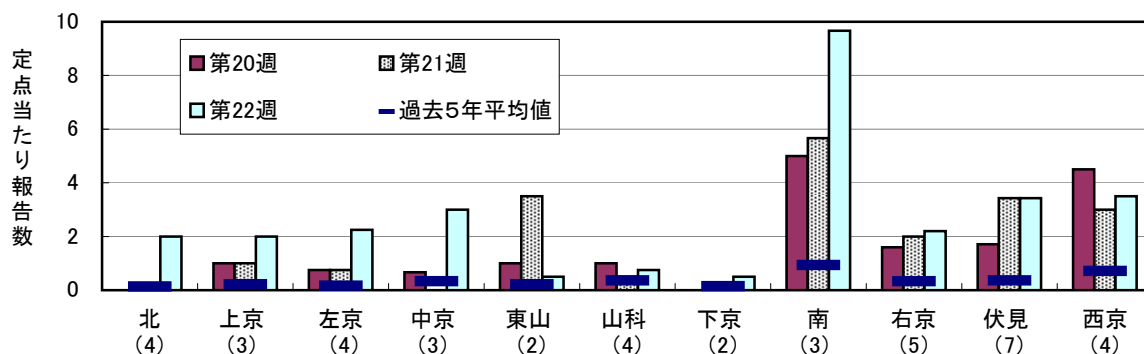
本市の定点当たり報告数 推移(平成17年～平成22年22週)



年齢階級別構成割合



行政区別定点当たり報告数の推移



()内は、定点医療機関数